

聖書日課

(4月27日～5月3日)

毎日聖書を読みましょう。

まず、神様の前に謙遜にみことばを聞くことができるように、みことばを慕い求める思いをもって読むことができるように、みことばに従うことができるように祈りましょう。

次に、その日の聖書の箇所をゆっくり2～3回読みましょう。そして、中心となる聖句とテーマを考えてみましょう。

解説を読みながら、今日のみことばを静かに思い巡らしましょう。

例)

今日、教えられた真理は何か？ (神がどのようなお方かなど)

悔い改めるべきことはないか？

従うべきことは何か？

感謝したり、神に賛美すべきことは何か？

みことばを通して教えられたことを思いつつ、もう一度祈りをもって、神の前に悔い改め、従えるように助けを祈り求め、神への感謝をささげましょう。

生田丘の上キリスト教会

4月27日（日）マルコの福音書1章1節 「神の子、イエス・キリストの福音の始め」

一見して誰もが気がつくことと思いますが、マルコの福音書には、マタイやルカにあるようなキリスト誕生に関する記述がありません。それは、マルコ自身が「イエスキリストの福音の始め」を強調したかったからだろうと思われます。マルコの言う始めとは、イエスキリストの福音による新しい世界の始まりであり、新しい時代の幕開けのことです。また、ここで言われている福音は、本来皇帝が民に施す恵み、戦争での勝利の知らせ、新しい皇帝の即位などを表していました。しかし、そのようにローマ皇帝が支配し、ローマ皇帝が福音の中心である世に対して、聖書は、神の子、すなわちまことの神であるお方がまことの人となって世に来られたこと、そして人類の贖いのために十字架につけられて命を捨てられたけれども、三日目に死から復活されて、天に昇り、今も父なる神の右に座しておられる方こそ、まさに福音の中心であると語っているのです。そして、このまことの神であり、まことの人であるこのお方こそ、新約という新しい時代の幕開けとなられたお方だということです。そして、本来福音はローマ皇帝によってもたらされるのではなく、イエスキリストによってもたらされるものだと聖書は語ります。世の人々にとっての福音とは何でしょうか。今の人々に福音をもたらしものは何でしょうか。また人々はどこから福音がもたらされることを期待しているのでしょうか。恐らく誰もイエスキリストとは思っていないかもしれません。しかし、自分の罪を悔い改めて神に立ち返り、イエスキリストを自分も罪からの救い主として信じるなら、誰であっても罪が赦されるというイエスキリストの福音の新しい時代が到来しているのですから、私たちも、この福音を一人でも多くの方々に証しし、宣べ伝えてまいりたいと思わされますし、今も福音を聞きたいと求めている方々がおられるはずですから、その方々に福音を届ける者となれるように祈りましょう。

4月28日(月) マルコの福音書1章2, 3節

「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。』」

2節に「預言者イザヤの書にこのように書かれている。」とありますが、実際にはイザヤ書からだけでなく、旧約聖書のさまざまな箇所から引用されています。例えば、「見よ。わたしは、使いをあなたの前に遣わし、」(出エジプト記23章20節)「彼は、わたしの前に道を備える。」(マラキ書3章1節)「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。』」(イザヤ書40章3節)です。このようにさまざまな旧約聖書の箇所から引用されているにもかかわらず、なぜマルコが「預言者イザヤの書にこのように書かれている」とイザヤだけを特筆したのか理由はよく分かりません。いずれにいたしましても、「このように書かれている」とは、決して主のみことばは書き換えられたり、修正されることなく、むしろみこころの時か来たなら、すべて成就することが意味されています。実際に、上記で示した旧約聖書の預言もバプテスマのヨハネが現れたことで成就したのです。聖書のみことばは、すべて「このように書かれている」と、これまでも神のことば、真理のみことばとして必ず成就すると信じられ、実際に成就してまいりましたし、将来のこともすべて成就すると信じていることができるのです。

「わたしの使い」とは、バプテスマのヨハネのことであり、「彼はあなたの道を備える」とありますが、ヨハネの務めは、主イエス様が来られることを人々に証しし、主イエス様が来られるための道備えをすることでしたが、それは、荒野で罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えることでした。主は、私たちにも主イエス様のための務めを与えて用いてくださいます。主が、そのようにして恵みによって私たちを用いてくださることを感謝し、強いられてでもなく、いやいやながらでもなく、喜んで、感謝しつつ、主のために与えられた務めを果してまいりたいと思わされます。

4月29日（火）マルコの福音書1章4節

「バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。」

バプテスマのヨハネが荒野に現れた理由は諸説あります。その時代の宗教指導者たちと一線を画するという意味もあったでしょうし、荒野は出エジプトを成し遂げた後、イスラエルの民が神に従わないことでさまよい歩いた場所であり、その中で神の救いのみわざを経験した場所でもありました。荒野とはそのような場所ですから、救い主イエスキリストの到来を待ち望むにはふさわしい場所とも言えるでしょう。

バプテスマのヨハネの罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマと当時のユダヤ人のきよめの儀式にはいくつかの相違がありました。まず一つが、ユダヤ人のきよめの儀式には、いけにえの動物が求められましたが、ヨハネのバプテスマには悔い改めが求められました。また、罪のために動物の血を祭壇に振りかけましたが、ヨハネは水を用いました。またユダヤ人は繰り返し儀式を行うことが求められましたが、ヨハネの悔い改めのバプテスマは一度だけの儀式です。そう考えました時に、ヨハネの宣べ伝えたバプテスマは、今まさに来ようとしていたイエス様にふさわしいと言えますし、イエスキリストの福音の始めにもふさわしいと言えるでしょう。それとともに、先ほども申し上げましたが、荒野において罪を犯した人々を先祖に持つユダヤ人に求められていたのは、何よりも罪の赦しに導く悔い改めでした。

私たちにもイエス様を通しての「罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ」が宣べ伝えられ、このようなイエスキリストの福音が証しされている時代に生きていることを感謝するとともに、今度は、その私たち一人一人が罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを人々に宣べ伝える者でありたいと思わされます。

4月30日（水）マルコの福音書1章5～8節

「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。」

召されたヨハネを通して神ご自身も働き、人々が自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けるように導かれました。人が主の召しに答えて歩む時に、主は責任をもってその人の召しを全うさせてくださることを信じましょう。

さらにヨハネは、イエス様について「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。私は水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります」と言いました。ヨハネは、明確にイエス様を人々に証ししています。まずは、イエス様を力ある方と言いました。力ある方を優る方とも言い替えることができるかとは思いますが、いずれにしてもヨハネは、自分を低くしてイエス様を高めようとしたのでしょう。それがその後の一文にも現れています。履き物のひもを解くというのは、しもべや奴隷の役割でした。しかしイエス様の前に出るなら、ヨハネは履き物のひもを解く資格のない、奴隷以下の存在だと言い、聖霊によってバプテスマをお授けになるとは、イエス様が救いを成し遂げられた後に、信じる者に約束としての御霊が下りましたが、イエスご自身がそのようにして豊かに聖霊を注いでくださるお方だと言っているのです。

ヨハネも主からの啓示を通してイエス様を知りました。そして後に来られるイエス様のことを知れば知るほど、彼はますます謙遜にさせられていきました。私たちは、どのようにイエス様を知らされているでしょうか。イエス様のことを知れば知るほど、イエス様の御前に謙遜にされていますか。そして、その謙遜さは日々の信仰生活の中でどのように現れていますか。祈り、礼拝、奉仕などに謙遜さが現れているでしょうか。

5月1日（木）マルコの福音書1章9～11節

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマを受けられた。」

マタイの福音書では、主イエス様がバプテスマのヨハネからバプテスマをお受けになるために来られた時、ヨハネはそうはさせまいとして、「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに。」と言ったと記されています。（マタイの福音書3：14）つまり、罪の赦しとしてのバプテスマ（洗礼）を受ける必要のない方がどうしてそのようにされたのかということに関しては、いくつかの理由が考えられます。その一つが、イエス様自身が「今はそうさせてほしい。このようにしてすべて正しいことを実現することが、私たちにはふさわしいのです。」（マタイの福音書3：15）と言われていたように、正しいこと、すなわち父なる神のみこころを地上ですべて成し遂げることです。それともう一つがメシヤ（救い主）として、ご自分を罪人と一つにされたということです。罪なきお方が、罪人の中にご自分の身を置かれたのです。これを受けて、キャンベルモルガンという学者は、「イエスはその生涯・・・死に至るまで人と同化することにご自分をささげられたのです。」と言いました。バプテスマ（洗礼）を受けることで、イエス様は、ご自分が罪人であるかのごとく、罪人の中に自らが数えられることを甘んじて受けられたのです。それは、イザヤが言いましたように、主イエスは「そむいた人たちとともに数えられ」（イザヤ53：12）る立場にご自分の身を置いてくださったとも言えますし、イエス様が、これほどまでに自分の身を低くしてくださったとも言えます。

私たちは、このところにイエス様の謙遜な姿を見るとともに、罪とは全く無関係なお方が、罪人の一人に数えられることを甘んじて受けられる姿の中に、救い主としてこの地上に来てくださったイエス様のはかり知れない愛を見る思いがします。このイエス様に私たちは心からの感謝をささげ、また心からイエス様をほめたたえ、そしてイエス様が罪人の一人に数えられるほどに、その身を低くされたように、私たちもイエス様にならって、自らが置かれている立場において自分を低くすることを学んでまいりたいと思わされます。

5月2日（金）マルコの福音書1：12、13

「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの試みを受けられた。」（13節）

12節で「それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた」とあります。もちろん、バプテスマのヨハネから洗礼をお受けになった後すぐにも理解できますが、「それからすぐに」という表現法は、新しい出来事や驚くべき事が起こることへの導入として用いられることもあります。ヨハネからバプテスマをお受けになったイエス様は御霊によって荒野へと追いやられ、そこに四十日間おられて、サタンの試み（欄外注：「別訳誘惑」）を受けられました。11節で、天から「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」との声がありましたが、イエスが神の御子であることも、イエス様が父なる神に愛されるお方であることも、サタンの激しい試みにあわないことを意味してはいませんでした。むしろ、「御霊はイエスを荒野に追いやられた」とありますように、サタンの誘惑を受けることは、父なる神のみこころであり、サタンはイエス様の救い主としての歩みを妨げたかったのだらうと思いますが、父なる神さまが、それをお許しになったということです。ですからイエス様に対するサタンの誘惑は非常に激しかったことはずです。そのようにサタンの誘惑を受けられたイエス様だからこそ、私たちを深くあわれんでくださることができるのです。

「野の獣とともにおられた」（13節）というのは、猛獣に襲われることがないように神様の守りがあったことを表しています。また、「御使いたちがイエス様に仕えていました」ので、御使いたちの守りもイエス様にはあったのです。私たちも確かにイエスキリストを救い主として信じ、神の子とされていて、神様に愛されているお互いであることは間違いないのですが、そのことは私たちが激しいサタンの誘惑を避けることのできる理由にはなりません。むしろヨブのように信仰を持っているからこそサタンは激しく私たちを試みることもありますし、みこころの中で主はあえてサタンの試みを許されることもあります。しかし、私たちがそのようなサタンの試みの中に置かれることも、信仰の苦難にあうことも、決してそれは父なる神様に見捨てられた証しではありませんし、神様はただ黙って見ておられるような方ではなく、常に神様からの守りの御手が私たちとともにあり、御使いを通して常に主は私たちを守り支えるようにしてくださるのです。そのことをともに信じたいと思わされますし、サタンも神の支配のもとにあり、神様の許しがなければ何をすることもできません。神はサタンよりはるかに力のあるお方です。だからこそ、その信仰をもって私たちはサタンの攻撃にさらされる時にも主に信頼することができるのです。

5月3日（土）マルコの福音書1章14節

「ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。」

ルカ3章19節を見ますと、「しかし領主ヘロデは、その兄弟の妻ヘロディアのことで、自分が行った悪事のすべてを、ヨハネに非難されたので」とあり、ヘロデは不当に自分の兄弟の妻を自分の妻にしたことをヨハネに責められていたことが分かります。そのためヨハネは投獄され、さらにマタイ14章1節以降を見ますと、ヘロデの命によりヨハネは不当に殺されることとなりました。私たちは、人を恐れ、人の反応を恐れるあまり、自分の言うべきことを言わなかったりすることがあります。しかし私たちが本当に恐れるべきは人ではなく神様です。もし私たちの語ったことや行ったことで、人が不快に思ったとしても、それが主の前に正しいことであるという確信があるならば、何も恥じることはありませんし、主が喜んでくださいます。常に、主の御前にあって語り、行動する信仰者とさせていたしましょう。

「イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。」とあります。イザヤ書9章1、2節に「異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。」とありますように、イエス様のガリラヤでの福音宣教の開始は、ある意味旧約聖書の成就の結果であり、神様ご自身のみこころであったことが分かります。ガリラヤは、捨てられた地を意味するガブルから来ていると言われていて、血筋を重んじるユダヤ人からは、異邦人のガリラヤと呼ばれてさげすまれていました。しかし、主は、そのようなガリラヤとそこに住む民をみこころに留めてくださり、イエスを通して福音が宣教されるようにしてくださったのです。私たちも、ガリラヤに住む民以上に神から遠く離れていた存在でしたが、福音が宣べ伝えられ、主の救いにあずかることができたことを心から感謝しましょう。